

善導と国家

爪 田 一 寿

問題提起

善導（六一三—六八二）の『安樂行道転経願生浄土法事讃』
卷下（以下、『法事讃』卷下と略す）に次のような一節がある。

又願、此功德資益大唐皇帝、福基永固、聖化無窮。又願、皇后慈
心平等、哀愍六宮。又願、皇太子承恩厚地、同山岳之莫移、福命
唐唐類滄波而無盡。（大正藏四七・四三八頁・上）

大唐の皇帝・皇后・皇太子の長命等を祈願するこの一節は、
従来善導浄土敎の有する国家仏敎的性格をあらわすものとして
捉えられてきた。^①しかし本当に「国家仏敎的性格」という
一言で片付けて良いのだろうか。本稿では①敦煌仏典写経跋
文との比較、②時代背景の考察という二つの側面から従来
の解釈を再検討する。

敦煌仏典写経跋文との比較

まず、敦煌仏典写経跋文に見られる、前掲の一節との類似
表現を検討してみよう。ここでは皇后への言及という点に注
目したい。

敦煌仏典写経跋文においては時の皇帝に言及するものも少
ない中であって、皇后にまで言及するものはさらに稀であり、
礪波護氏の調査によると、（ア）スタイン本「二五一五号」、
（イ）ペリオ本「二〇五六号」、（ウ）スタイン本「二四二四号」
の三本しか存在しない。このうち（ア）、（イ）は則天皇后武
氏（在位六五五—六八三）が皇后である年代のものであり、
（ウ）は順天皇后韋氏（在位六八四、七〇五—七一〇）が皇后で
ある年代のものである。

則天皇后武氏、順天皇后韋氏は「武韋の禍」と言われるよ
うに、皇帝にもまして権力をふるった皇后であり、そのよう
な皇后が在位している時代にのみ、仏典写経跋文において皇

后への言及がなされるということが分かる。

そこで、善導の生存年代ということで考えるならば、六五年（永徽六年）に武氏が高宗（在位六五〇—六八三）の皇后に即位した後、善導が入寂する六八一年（永隆二年）までの間、則天皇后武氏が非常な権力を振るっていた。善導による皇后への言及を敦煌仏典写経跋文における皇后への言及と同様に考えるならば、前掲の『法事讃』の一節も具体的な歴史状況と対照して読むことが出来ると考えられる。

すなわち、一般的に皇帝・皇后・皇太子と言うのではなく、善導の念頭には則天皇后武氏を中心とする具体的な唐の帝室の姿があったと言える。

時代背景の考察

では、前掲の一節が書かれた具体的な時代背景について検討してみよう。

まず、「又願、皇后慈心平等、哀愍六宮」という文言について見てみよう。ここにいう「六宮」とは後宮のことであり、そこには通常、数千人の女性たちが外部との接触を一切絶たれた状態で起居していた。皇后はこの後宮を代表者として統括し、内部処罰の権限を与えられていた。

則天皇后武氏と皇后の位をめぐって争った瀟淑妃の生んだ二人の娘、義陽公主と宣城公主とが後宮に幽閉され続けてい

たというエピソードに端的に見られるように、則天皇后武氏は後宮において絶大な権限を振るい、自分の地位を脅かす可能性のある女性たちを悲惨な境遇へと追いやった。

このような状況と先の文言を比較対照するならば、「皇后慈心平等、哀愍六宮」という善導の言葉は非常に現実味を帯びたものとして捉えることが出来る。

次に、「又願、皇太子承恩厚地、同山岳之莫移、福命唐唐類滄波而無盡」という文言について見てみよう。

気賀澤保規氏が端的に指摘しているように、隋代から唐代にかけては長子相続の制度が確立しておらず、「長子↓皇太子↓皇帝のコースをとったものは皆無といつてよい」という⁽³⁾状況であった。その結果、皇后に即位したものは自分自身の息子を皇太子に即位させるために様々な策を弄することとなる。

このような「不安定な皇太子の地位」⁽⁴⁾という状況の中にあつて、則天皇后武氏の時代には自分自身の息子でさえも不安定な地位に置かれることとなつた。年表⁽⁵⁾に示したように、自分の都合で次々と皇太子を廃立し、毒殺したり自殺に追い込んだりといったことまで行っている。

「皇太子承恩厚地、同山岳之莫移、福命唐唐類滄波而無盡」という善導の言葉は、単なる定型句ではなく、先と同様、非常に現実味を帯びたものであると言える。

結論

以上の考察から、前掲の『法事讃』巻下の一節は、単に善導の国家仏教的性格をあらわすものとして捉えられるべきではなく、則天皇后武氏によってもたらされた後宮の女性たちの不遇な境遇や、次々と廃立される皇太子たちの悲劇という、帝室を取り巻く具体的な歴史状況を踏まえた善導の言葉として捉えられるべきであると言える。

則天皇后武氏の肝いりで造営された洛陽・龍門の大盧遮那仏の造営に際して、善導が検校僧を務めていたことを考えるならば、帝室の状況を知悉していたであろう善導が、悲慘な歴史的现实に対してそれを慨嘆し、かくあつて欲しいという願いを込めた発言として、捉えることが妥当であろう。

【年表】

西 暦	事 柄
六四九年	太宗の崩御。高宗が即位（在位六四九～六八三）。武将、感業寺で尼となる。
六五〇年	この頃、後宮に戻る。
六五二年	高宗の第五子（武照の長男）李弘、誕生。昭儀の地位を得る。
六五四年	武照の生まれたばかりの長女を殺害。（皇后を犯人に仕立てる）。

六五五年	王皇后と蕭淑妃を廃位。武照、皇后となる。
六五六年	李弘、皇太子となる。
六六〇年	二聖（高宗・武后）政治が始まり、政治の実権をにぎる。
六七五年	李弘を毒殺。弟の李賢（武照の次男）が皇太子に。
六八〇年	李賢を廃し自殺に追い込む。武后の三男、李哲（李顕）が皇太子に。
六八三年	高宗が崩御。李哲（李顕）が即位（中宗）。後に幽閉。四男が即位。

- 1 藤田宏達『善導』（人類の知的遺産一八、講談社、一九八五）一七〇頁。
- 2 礪波護『唐代政治社会史研究』（同朋舎出版、一九八六）
- 3 気賀澤保規『絢爛たる世界帝国 隋唐時代』（中国の歴史〇六、講談社、二〇〇五）一七七頁。
- 4 同右。
- 5 年表は同右、外山軍治『則天武后 女性と権力』（中央公論社、一九六六、気賀澤保規『則天武后』（白帝社、一九九五）を参考に作成した。

（キーワード） 善導、法事讃、国家仏教

（東京大学大学院）

pāramitopadeśa, in which bodhisattvas are born in this world in order to enlighten all sentient beings, also informs its philosophical background.

14. On Tanluan's Interpretation of “*shixinzuofu shixinshifo* 是心作佛是心是佛”: In relation to the Buddha's interpretation of “*sanye zhuangyan gongde* 三業莊嚴功德”

Gakugen YOSHIMIZU

I discuss Tanluan's interpretation of “*shixinzuofu shixinshifo* 是心作佛是心是佛” in the *Guan jing* 觀經 in relation to the Buddha's interpretation of “*sanye zhuangyan gongde* 三業莊嚴功德.” I believe that the interpretation of “*shixinzuofu shixinshifo*” in Tanluan's *Wangsheng lunzhu* 往生論註 is a premise of the explanation, in which the body of Amida Buddha is visible to all sentient beings. I also believe that Tanluan tried to explain that the body of the Amida Buddha is not far from all sentient beings.

15. Shandao and the State

Kazuhisa TSUMEDA

Traditional studies conclude that Shandao's Pure Land Buddhism has the character of State Buddhism. But when we analyze the text of the *Fashi zan* in detail, another conclusion follows inevitably from our analysis. In the text of the *Fashi zan* (T47, p.483a), Shandao prayed for the happiness of the Crown prince and the women in the seraglio. They were suffering under the tyranny of the Empress Wu. Considering the historical situation, Shandao's words in the text of the *Fashi zan* are not to be read as depicting the character of State Buddhism but rather as his remonstrance against Empress Wu.

16. On the ‘Four Interpretations’ of the *Fahua wenju*

Hiroshi KANNO

This paper reconsiders the applicability of Shun'ei Hirai's critical assess-